



ハイエルフの旅立ち・上

novels

大森藤ノ

illustration

はいむらきよたか

「もうこりこりだ！」

その『ハイエルフ』は、広すぎる己の自室で、大声で叫んだ。

「リ、リヴェリア様っ、そんな大声で叫ばれては王に咎められてしまいますっ」

「どうして私は自分の部屋で好きに叫ぶこともできない！ 何度だつて言つてやるぞ、アイナ！ 私はこんな鳥籠のような生活、もううんざりだ！」

踊るように跳ねる寶石のごとき翡翠色の長髪。比喻抜きで女神にも勝る美貌を今は盛大に歪めて、まるで癩癩を起こした子供のように喚き散らす。そんな振る舞いの中でも品の良さが滲み出ているのは、ひとえに彼女の生まれが起因していた。

リヴェリア・リヨス・アールヴ。妖精の『始祖』を意味する『アールヴ』の名の通り、誇り高き王族『ハイエルフ』の王女である。

ここは『アルヴの王森』。大陸の遙か西方に連なる霊峰『アルヴ山脈』と並んでエルフの聖地と称されており、王族の里でもある。巨大な聖王樹がそびえる森の中心地に木々の城下町が広がる、妖精の幻想郷だ。

その中でも白聖石で築き上げられた王城は聖王樹の根元に悠然とそびえており、王女の自室は高い場所にあつた。

「あの言い草を聞いたか！ 『もつと慎みを持って』だど？ 私は父上の人形ではない！」

「リヴェリア様、どうか、どうか怒りをお鎮めになつて下さい……！」

リヴェリアが激怒しているのは数刻前の出来事だった。実の父、つまり真正正銘エルフの一族の頂点であるラーファル王に玉座の間にまで呼び出され、王女に相応しくない行いを咎めら

れたのである。その内容とは、外の世界に興味を持つてゐること。

里を出入りする王族お抱えの行商から、外界の品々をこつそり買い取つてゐることがバレたのである。

「『外の世界は汚らわしい』？ 『蛮族どもが跋扈する辺境の地』？ 森から一步も出たことのない父上がどうしてそんなことを言える！」

リヴェリアは俗に言う『お転婆な王女』だった。部屋で詩集を読むより弓を持つて狩りに行くことを好み、聖王樹せいおうじゆに祈りを捧げるより外から参拝に来る下々の同胞達ユルブと交流することを望んだ。それは王族としての振る舞いを強要されてゐる反動とも言えた。

リヴェリアはずつと窮屈な思ひを味わひ続けている。

王族としての礼節はまだいい。高貴な身分に生まれた務めだと思つてゐるし、理解もしているつもりだ。だが同胞達の過度に謙つた態度には辟易してゐるし、何より父王が強い檻の中のよな生活には不満が溜まりに溜まつてゐた。

下界の住人の父と言える超越存在デウスデア、『神々』が次々と降臨してゐる今、王族としての責務など実質骸化してゐるというのに。里から一步も出ようとせず、世界に比べれば本當にちつぽけな共同体の格式だけを重んじて、いつたい何になるというのか。

——『神時代』を迎へてゐる今、どうして我々は森の奥深くに引きこもつてゐる？

リヴェリアが胸に秘めてゐる衝動という名の疑問は、日に日に大きくなつてゐた。

「知らぬものをくだらぬと言つて一蹴する。それこそ父上が嫌う無知蒙昧ではないか……！」

何より、宝物であつた下界の世界地図。それを破り捨てられたことが決定打であつた。潤んだりヴェリアの瞳の先、大きな寝台ベッドの上には持つて帰つてきた地図の残骸が散らかつてゐる。

この世に生を受け七十年。この時、とうとう王女リヴェリアの堪忍袋の緒は切れたのだ。

「私は里を出るぞ、アイナ！」

「この町からならハイエルフの里、行けなくはないんやろー？ 森の近くを通りかかる辻馬車があるって聞いたでー」

「……最近やたらと商人達と話し込んでいると思つたら……」

たっぷり呆れた後、苦笑を浮かべるフィンに「グフフ」と下品な笑みを漏らすロキ。
フィンの主神は既に、次に迎えたい団員の標的を絞り込んでいたらしい。

「貴方の趣味に口を出す気はないと言つたけど……王族は流石に諦めた方がいい」

「いやーやー！ ハイエルフの森いきたーい！ ごつつう美人で『ロキ様あん』とか言つてくれるスーパー王女様ゲツチュしたーい!!」

「エルフの王女は間違つてもそんなこと言わないよ、ロキ……」

卓上に身を投げてじたばたするロキに、ただ一人の眷族は溜息交じりに言う。それは旅の中で彼女がどのような神物なのか熟知したかのような嘆息だった。客で賑わう夜の酒場で注目を集める中、フィンは鎧戸の外で行き交う旅人や馬車の往來を横目に眺め、語り出した。

「気難しい者が多いとされるエルフだけど、王族はそれに輪をかけて矜持が強い」

論ずようにフィンが聞かせたのは、天界に暮らしていた神では精通していないであろう、下界でのハイエルフの『文化』についてだった。

神々の降臨により他種族間の交流がより活発になつてこの『神時代』、未だに森の奥深くに閉じこもる一部のエルフの中でも、王族の里は最も閉鎖的と言われている。その根幹にあるのは選民主義。見目麗しい自分達を称え、他種族の者を醜い、下賤などと言つて蔑む心だ。

広大な王森に立ち入る他種族の者は徹底的に排除されており、通行を許可されているのはなんと『古代』以上から付き合ひのあるお抱えの行商など、ごく僅かな者だけ。迂闊に近付く者がいれば王族の『魔法』が飛んでくる。神々さえ例外ではない。

「でもフィン、それつてハイエルフは神々の『恩恵』を授かつてないつてことやろ？ ちよい

と物騒やけど、強い【ファミリア】なら武力行使で無理矢理入るっちゅう手も……」

「エルフほど同族意識が強い種族はいない。迂闊な真似をすれば『国際問題』に発展しかねない。このご時世でそんな言葉、笑ってしまいうけど……決して冗談じゃないんだ」

侵入者を許さない徹底ぶりは、【ファミリア】不在という戦力の観点からすれば容易く攻め落とせそうなのだが、もし王族の里に何かあった時、世界中のエルフが黙っていない。

いかなる所属も超えて比喩抜きで蜂起し、地の果てまで咎人を罰しようとする世紀の大事件と化するだろう。どんなに強大な国も、【ファミリア】も、『アルヴの王森』にだけは手を出せずにいるのが理由だ。それほどまでに、エルフにとって王族は尊崇の対象なのである。

娯楽好きで尊厳の欠片もない——降臨前の人類の信仰や価値観をブチ壊しにした——本物の神々とは、比べるまでもなく。

「それにエルフ自体……仲間に加えるのはあまり気が進まないな」

「ん、なんや？ フィンはエルフが苦手なんか？」

「苦手、というより、向こうの反応がね。小人族は他種族から見下されがちで、中でもエルフは鼻持ちならないというか……いや全てのエルフがそうだとはい僕も思っていないが……とにかく、頭の上で鼻を鳴らされてしまう光景が目には浮かぶんだ」

それはフィンが何度も経験してきたことでもあった。

エルフ達は『矮小な』と言って小人族を侮蔑する。

「小人族を最初の眷族に迎えたという事で、きつと貴方も蔑まれるよ、ロキ」

小人族そのものを変えようとしているフィンだ、エルフという種族に偏見も嫌悪も持つつもりはない。ただ、『順序』があるとも思う。少なくともエルフを勧誘するのは、もう少し仲間が増えてからでもいい。

賢く狡いフィンは、小人族以外の仲間がいることでエルフの難しい自尊心も和らぎ、入団し

やすくなるだろうと踏んでいる。稀少な魔法種族マジック・レースはいてくれたら大いに助かるが、この状況では決して必須ではない。フィンには自分の考えを包み隠さず話した。

「なるほどなあ〜」

「納得してもらえたかな？」

「んじゃあ、ハイエルフの里に行つてみるか！」

「僕の話聞いていたかい……」

満面の笑みで話を堂々巡りさせるロキ。というより、ちつとも揺らぐことのない美女・美少女に対する執念。口もとに麦酒の泡をつけるその笑みを見て、主神の神意は翻らないことをフィンは悟った。

もう一度溜息をつき、唇を曲げる。

「わかったよ……明日の朝、ここを発つて『アルヴの王森』へ向かおう。お目当ての人材が勧誘できなくても、文句を言わないでおくれよ？」

「いやっふー！ もうフィン大好きー！ 小人族バルグムめっちゃチョロいわーフヒヒッ！」

「本音が漏れているよロキ」

苦笑して指摘してやると「あ、ウソウソじようだーん！」とロキは取り繕う。

ともかくこうして、フィンとロキは『アルヴの王森』を目指すことを決めたのであった。